

校友会長 × 若手幹事 座談会

商学部校友会の明日を語ろう



いっしょに未来へ。

～ 世代を越えて共に創る校友会の新しい時代～

商学部校友会の山本会長と若い幹事たちが座談会を開催。

より多くの人たちが楽しく集い、

母校の支援に力を注げる組織へとパワーアップしていくために、

50周年から100周年、そしてその先へと活動を継続していけるよう

先輩と後輩の垣根を越えて率直な意見交換を行いました。



校友会常任幹事
校友会総務委員会担当

おおはし たかおき
大橋 孝起 平成21年卒

卒業後、建設関連の企業に就職。
営業職一筋で働いています。



校友会幹事

おかむら あきひで
岡村 亮秀 平成29年卒

銀行に勤務。法人営業を2カ店
経験し、現在は日系企業の海外
進出を支援する部署に勤務。



校友会幹事
在学中「砦祭実行委員会副委員長」

ねもと ゆい
根本 悠羽 平成30年卒

医療系のコンサル会社勤務。クリ
ニック経営のサポートや医療事
務の方に講義やセミナーを行っ
ています。



校友会幹事
在学中「砦祭実行委員会副委員長」

よしだ あみ
吉田 亜未 令和3年卒

顧客の課題解決のためのシステム
を企画・構築し、その運用保守を請
け負うSierでエンジニアをしてい
ます。

恩返しの想いで 校友会の活動に参加



日本大学商学部
校友会会長
やまもと ゆうじ
山本 裕二

——まず山本会長から商学部校友会が50年前にどのような目的で誕生し、現在を迎えているか、教えていただけますでしょうか。

山本:日本大学では、都道府県の各支部組織の校友会に加えて、商学部校友会のような学部校友会があります。どちらも会員相互の親睦向上を図り、母校の興隆発展に寄与することを目的に活動しています。学部校友会は学生支援に特に力を入れております。つまり、商学部校友会を含む各学部校友会がパワーアップすればするほど、母校の興隆発展に寄与できることになります。

商学部の校友会は2024年で半世紀の歴史を築きました。1936年に商経学部から経済学部と商学部が分離し、1963年にこの砧キャンパスに移ってきました。その際に商学部に校友会がないということで1971年に商学部砧同窓会が有志によって発足したのです。この50年史でもインタビューが掲載されておりますが、初代会長が最高顧問の菅さん。分離した商学部卒業一期生です。その後、1974年8月に正式に日本大学商学部校友会が誕生し、50年の歩みをスタートしました。

——若い世代の幹事の皆様が商学部校友会の活動に参加した理由は何でしょうか。

大橋:勤務先が建設関係でなんと当時、私の上長も日本大学商学部出身だったのです。その上で取引先となるゼネコンの方も商学部校友会の会員でした。その方から校友会の活動を勧められたのがきっかけです。

岡村:私は、卒業した後に当時の学校職員の方から連絡があり「素晴らしい人たちがいる会だからまず来てみなさい」と誘われたのが活動の始まりでした。以降、ずっと継続している理由は、実際に素晴らしい方がおられ、皆さんとふれあうことで、自分の人生をより豊かにできると思っているからです。また、日大商学部を卒業して良かった、と思える場面が何度もあり、自分を高めてくれたことへの恩返しの想いもあります。

根本:砧祭実行委員会副委員長であった関係もあり、学生の頃から商学部校友会の方々にご支援をいただきました。ですから自分自身も卒業したら、何か恩返しをしたいという気持ちで活動させていただいています。

吉田:私も砧祭実行委員会で活動させていただく中、校友会の諸先輩方に大変お世話になり、充実した学生生活を送ることができました。その分、次の世代に“恩送り”ができたらいなという気持ちで参加させていただいています。また家と会社の往復になる日常生活の中で自分自身に刺激を与え、幅広い世代の方々と深く関わることができています。

求められるのは 組織活性化への 新しいチャレンジ



——会長としては若い世代にどのようなことを期待しますか。

山本:商学部校友会の組織は新年会の状況をみますと100人を超える皆さんに役員を担っていただいています。ただ昭和世代の跡を継いでくれる平成以降の世代が少ない。その意味でここにいる皆さんが、仕事と両立しながら商学部校友会を盛り上げていただければ有難いです。大事なことは組織の活性化だと思います。そのためにはキャリアアップ、スキルアップ、子育て等に役立つ企画がもっとあってもいいと思います。どんどん新しい試みにチャレンジしてほしい。そして、楽しく、おもしろく、わくわくするような組織にさせていただきたいと思います。

商学部校友会の明日を語ろう

——商学部校友会の活動では会議など皆が集うことが多いと思います。どういった雰囲気でしょうか。

根本: 学生の頃から知ってもらっているので私にとっては親戚の皆さんと過ごしているような感覚ですね。アットホームで互いに尊重しあえる関係ができています。

吉田: 年が離れていても人間関係の距離は近いのではないのでしょうか。その上でお互いへの配慮や尊敬があるように感じます。



大橋: 常任幹事の中では若い世代に入りますが、意見もいやすい雰囲気があります。会議では「大橋さん、どう思いますか？」など積極的に聞いてくれるのも嬉しいですね。

岡村: 役職で上下関係はありますが、上司と部下の関係ではないですし、どのようなことも話しやすいと思います。

—— 諸行事に参加してどのような感想をお持ちでしょうか。

大橋: 今年度、大学の方々と意見交換会に出席させていただきました。大学に足を運び、現場の声を聞くことで今の学生が抱えている課題を知るきっかけにもなっています。また昨年末には、インゼミ大会に校友会側の審査員としてお招きいただいたのですが、そのプレゼンテーションを拝見し、想像していた以上に学生たちが勉強し、努力していることに気づかされました。日本大学が抱える様々な問題で報道に接するたびに残念な思いがしていましたが、心が軽くなったのを覚えています。

岡村: 商学部校友会の未来を考えれば、もっと若い世代が増えないといけないと思っています。以前、アイデアとしてご提案し実現したのは、卒業生が就職指導課といっしょに在学生の就職活動の支援を行うことでした。ただ、それだけではまだまだです。もっと若い世代に魅力的な会になる必要性を、いろいろな行事に参加にするたびに痛感しています。

卒業生として社会で活躍することで母校に貢献

根本: イベントで久しぶりに友だちと再会したり、みんなでおしゃべりをしたり、とにかく参加することが楽しいです。後輩たちが参加してもらえるかどうか、楽しそうな会であることが大事ではないでしょうか。

吉田: 私も楽しい、という感覚でイベントも参加させていただいています。ただ、同世代や後輩たちがもっと気軽に参加できるようなアイデアは必要かも知れないですね。

—— Z世代や共働き世帯など時間を効果的に使おうとする人は、タイムパフォーマンスの略語であるタイパを重視する傾向が強いと伺っています。タイパの観点から商学部校友会の活動はどのように映っているでしょうか。

大橋: たとえば今日の座談会も「50周年に巡り合うことができた」という光栄な想いで参加していますし、後輩に久しぶりに会えるので楽しみにしてきました。活動に参加する価値は一回一回感じています。

岡村: 自分の意思で行っていることなので、時間を無駄にしていると感じたことはないです。もともと国や地域、母校など自身が関わってきたことに貢献しようという意識がありますので、この活動も自分のしたいこととして主体的に参加しています。

根本: まずは仕事や家族のことが大事ですが、商学部で学んだ4年間は、私の人生に大きな影響を与えていただきましたので、商学部校友会の活動も優先順位としては上位に入っています。私にとってタイパは、とても良いですね。

吉田: とても刺激があり、自分磨きの場所になっています。時間を使ってでも得られる価値があると思います。

—— 今後、商学部校友会の活動にはどのように関わっていきたいと考えていますか。

大橋: 体が元気で地方に転勤にならない限りは、頑張っていきたいと思っています。日大に対する愛着もありますが、やはり商学部愛の方が勝っています。地方に行けば学部校友会としての活動が難しくなりますので、こちらにすることが鍵になりますね。

吉田: 仕事でも責任が重くなっていくと思いますし、様々なライフステージが変わっていくと今より忙しくなるかも知れません。ただ私の人生には、商学部校友会というパーツはずっと持っていたいし、工夫して両立することで、後輩たちの良い事例になればいいと思っています。

根本: いい意味で変わらず関わっていききたいし、できることはお手伝いしていききたいです。また、卒業生として社会で活躍することも母校に貢献できると考えていますので、仕事も頑張っていきたいです。

岡村: 同じ想いです。仕事で良い結果を出すことが母校の名前を高め、後輩を支援することになる。そう思えば、より一層日々の業務にも力が入りますね。

自分を磨ける 第三の場所になってほしい

—— 今後はどのような組織にしていきたいでしょうか。

吉田: たくさんの方が集まってほしいです。そこに必要なのは、雰囲気の良いさなのか、魅力的なコンテンツなのかは検証すべきですが、その時代に合うよう、柔軟に変化しながら、幅広い世代が賑やかに集える場にしていきたいと思っています。

根本: 今、若手20代から30代の幹事がいることも魅力の一つです。その上で会社でも、家庭でもない第三の場所、いわゆるサードスペースになってほしいと考えています。

岡村: より卒業生から必要とされる存在、価値ある場所となるような組織づくりをしていきたいと思っています。また社会で力をつけたメンバーが結集し、大学の様々な問題解決をサポートしていけるような場になれば、さらに素晴らしいと思います。

大橋: 今後も、何かにチャレンジ中の学生や悩んでいる後輩たちの支援を続けていきたいと思っています。そのことで「あのときの恩返しをしたい」というような人たちがきつと商学部校友会に集ってきてくれると信じています。

山本: 自分のビジネスに役に立つものがあれば活動は面白くなると思います。そのために何か魅力的なものがほしいし、若い世代主導で何かを生み出す時期がきていると思います。

—— 最後に現役の学生たちに応援メッセージをお願いします。

大橋: 今、直面していることに頑張ってもらいたい。ただ力みすぎず、行き詰ったときは目線や立ち位置を変えるなど、上手にバランス感覚を取ることで解決の糸口がつかめることもあります。ずっと応援しています。

根本: 大学時代の友だちは、一生の友だちです。学生時代にしかできないことを、仲のいい友だちと探して実現してほしいと思います。

吉田: 好きという気持ちを大事にしてください。学生時代は何もしがらみがありません。その中で自分が何をしたいか、という“自分の定義づけ”が将来の仕事や生き方にきつとつながっていきますよ。

岡村: 人生を通して何を成したいのか、そのためにはどんな道に進む必要があり、今何をすべきなのか…など、是非考え、悩み抜いてほしいです。また、学校の評価というのは様々です。しかし、学校の価値を落とすのも上げるのも私たち自身です。であれば、自分が大学の価値を高めるような活躍を社会ですれば良いじゃないか、私はそう自分自身に言い聞かせています。

山本: 本日は若い世代の頼もしいお話に希望と勇気をいただきました。今後とも商学部校友会を頼みます。ありがとうございました。

一同: ありがとうございます！

